慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	王惲詩に現れる農民 : 喪亂詩を繼ぐもの
Sub Title	Wang Yun (王惲) 's poems and sayings about farmer images
Author	髙橋, 幸吉(Takahashi, Kōkichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.13 (2020.) ,p.71- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20200331-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

王惲詩に現れる農民

――喪亂詩を繼ぐもの――

髙橋幸吉

一．はじめに

金朝滅亡後、蒙元初期の華北の詩壇は元好問が牽引し、多くの詩人たちが元好問詩から影響を受けていると指摘されている。しかしこの時代で詩文集が現存する人物は少なく、具體的な影響關係を詳細に考察した研究が未だ無い。本稿では蒙元初期の詩壇で比較的重要な位置を占め、詩文集が現存する王惲（一二二七～一三〇四）の詩を取り上げる。

王惲は元好問に傾倒しており、『四庫全書總目提要』でも「惲の文章は自ら謂ふらく元好問に學ぶと、…（中略）…亦た能く遺山を嗣響す（惲文章自謂學於元好問、…亦能嗣響遺山）」と評されている。では王惲詩と元好問詩にはいかなる類似性が見られ、その中で王惲詩獨自の特徴としてはどのような要素を擧げることができるのだろうか。

王惲については史學においてその著作が資料として多く引用されるが、文學的側面については二〇一〇年代半ばからようやく幾つかの論文が發表され始めたに過ぎず、その詩文の價値については全く定まっていない。ここでは金詩から元詩への影響を探りつつ、詩人王惲の位置づけを模索したい。

二、蒙元初期の華北と北方詩壇

モンゴルの南進に伴い、金朝は貞祐二年（一二一四）開封へと遷都する。このとき女真族を伴って南方へ避難したが、女真は皆兵制度により軍事や治安維持などの主な擔い手であったため、金朝が放棄した地域は軍事的空白地域となった。これらの地域では殘された人々が自衞するほか無く、そしてそれらが幾つかの小集團としてモンゴルと金の間で離合集散を繰り返していた。この狀況に加えモンゴルが金朝を滅ぼした後も、モンゴルによる略奪が横行し、財貨や人間を略取することが頻繁に行われた。その結果人口は激減し、『元史』の記述では中統年間の記錄として百四十七万六千百四十六戸[1]という數字が記載されているが、これは金朝泰和七年の七百六十八万四千四百三十八戸[2]と較べて五分の一以下に過ぎない。多くの人口が戰亂によって失われ、政府が把握し得た定住者は五十數年間で八割以上減少している狀況にあった。

またモンゴルの本格的侵攻が始まってから金朝が滅亡するまで二十年餘りの時間があり、その間縮小し續けた領土から戰費を捻出したため、金朝統治下の地域もすでに疲弊していた。このような狀況のなかで建國初期の元朝は流民を鄉里に返し、農地の保護と屯田による開墾などの農業政策に力を注ぐことにより、少しずつ華北社會の安定と生產力を回復させていった。

一方で文學活動に目を向けると、華北の詩壇では、元好問がフビライ卽位の三年前、一二五三年に世を去った。この後フビライの治世では詩文の中心的存在となる、盟主たりうる人物は出現しなかった。この狀況を査洪德氏は「元好問無き元好問時代」[3]と概括している。そしてその後の狀況について、『元詩選』の編者顧嗣立は『寒廳詩話』で「東南は倡ふるに趙松雪孟頫より…（中略）…時の平を承くるに際し、盡く宋金の餘習を洗ひ、而して詩學之が爲に一變す（東南倡自趙松雪孟頫…時際承平、盡洗宋金餘習、而詩學爲之一變）[4]。」という認識を述べているが、これは元人の認識ともおおむね一致しているであろう。蘇天爵は「我が國家は中國を平定し、士は金宋の餘習を踵ぎ、文辭は率そ麤豪衰苶なり。…延祐以來…雅正の音を以て時に鳴り、士は皆な轉じて相ひ效ひ慕ひ、而して文章の習今 獨り盛んと爲れり（我國家平定中國、士踵金宋餘習、文辭率麤豪衰苶。…延祐以來…以雅正之音鳴於時、士皆轉相效慕、而文章之習今獨爲盛焉）[5]。」と述べ、歐陽玄は「皇元混一の初、金宋の舊儒は館閣に布列し、然して全て其の文氣高なる者は崛強、下なる者は委靡、時に舊習を見す。平を承くること日び久しく、四方の俊彦は京師に萃まり、笙鏞 相ひ宣しく、風雅 迭ひに唱ひ、治世の音 日び益ます以て盛んなり（皇元混一之初、金宋舊儒布列館閣、然全其文氣高者崛強、下者委靡、時見舊習。承平日久、四方俊彦萃於京師、笙鏞相宣、風雅迭唱、治世之音日益以盛矣）[6]。」と述べ、楊彝「子淵詩集序」は「國朝は南北混一し、宗工繼作、中和雅正の聲を以て、而して金宋の餘習を革む（國朝南北混一、宗工繼作、以中和雅正之聲、而革金宋之餘習）[7]。」と述べている。

これらを勘案すると元代の人々は、南宋を併合して戰禍から恢復し、江南の士人が大都へ集まった頃から詩文に大きな變化があると認識している。それ以前の王惲が活躍した時代は「金宋舊儒」による「金宋之餘習」であり、いまだ「治世之音」が興らない時代であった。この「餘習」は蘇天爵が「麤豪衰苶」と形容し、歐陽玄が「高者崛強、下者委靡」と評した特徵を認めうるものであった。この「崛強」について張晶氏は、金朝の遺民の詩が金末の

餘習として「民族の矛盾・階級の矛盾・社會の現實を明示して新王朝を褒め稱えていない」[8]ことを指摘している。

全ての詩がこの指摘の通りであるとは言えないが、當時の荒廢した華北の社會を詠った詩が一定數存在するのは事實である。王惲は全一百卷にも及ぶ詩文集を殘しており、そのうち詩は卷二から卷三四の計33卷を占める。その詩の大半は日常のやりとりや宴集の場においてのものであるが、農民などの庶民に言及した詩が詩題にして20ほど存在する。これらは「崛强」と評される、前王朝の「餘習」に屬する詩であると言ってよいだろう。

三、巡檢する王惲、語り合う王惲

王惲は金に仕えた家系に生まれた。祖父・父ともに武散官（職掌のない武官）で、祖父は從八品下、父は從七品下でその官途を終えている。武官というわけではなく、父王天鐸は戶部にも勤めており、この方面の業務に通曉していたようである。そのため金朝滅亡後はモンゴル麾下の耶律買奴のもとで戶口の管理に從事していた[9]。民衆との接點の多い下級官僚を排出する家系だと言えるだろう。十七、八歲頃から近隣の蘇門山で讀書に勵み、ここで王盤や姚樞らに學ぶ機會を得た。特に王盤は生涯に渉って師事し續けた人物であり、科擧が廢止された時代において「有用之學」を提唱して、王惲に少なからぬ影響を與えている[10]。中統元年（一二六〇）、三十四歲のときに姚樞の元で東平府の幕僚となり、その後はフビライに抜擢されて中央官界へと官途を進めた。以降、中央で翰林院などで奉職する一方で、幾度か地方官として提刑按察使、同副使を努めている。

提刑按察使、同副使は至元六年に農業振興もその職務に加えられており、管轄地域を巡檢する際に農事にも注意を拂う必要があった。例えば次の「憫雨行」詩は燕南河北道提刑按察副使を務めていた時期の作である。王惲は本

詩の前年至元十六年（一二七九）にこの官に任じられている。詩題には「至元十七年夏四月廿四日、束鹿縣より深澤に入り、午に西河郷に憩ひ、父老の語を錄し、車中に足して此の詩を成す。時に所在に雨を祈る」とある。このとき眞定（現在の河北省石家莊市正定縣）におり、束鹿縣（同辛集市）から深澤縣（同石家莊市深澤縣）を通る順路で視察していた。いずれも現在の石家莊市の東65キロメートルほどに位置する。そして深澤縣の西河郷（現在の深澤縣西河村。縣南部に位置する）で昼休みをとり、土地の長老の話しを聞いて、その後馬車の中で詩に仕立てたと創作の經緯を述べている。

旱蟲食桑桑葉無　旱蟲　桑を食べ　桑葉無く
穀不出壠麥欲枯　穀は壠を出ず麥は枯れんと欲す
人間四月號清潤　人間　四月　清潤を號(とな)ふも
物色慘悴幾焚如　物色　慘悴　幾んど焚如たり
車前田畯向予説　車前の田畯(でんじゅん)　予に向ひて説く
半歳無雨曽霑濡　「半歳雨無し　曽ては霑濡(てんじゅ)たり
春蠶滿箔棄欲盡　春蠶箔に滿つるも棄てて盡きなんと欲す
鋤戸趁熟多空廬　鋤戸は熟(みのり)を趁(お)ひて多くは空廬なり
社翁致禱略不神　社翁は禱りを致すも略(ほ)ぼ神ならず
盼盼一雨何時蘇　盼盼　一雨　何れの時にか蘇へらむ」と
…（中略）…

昨朝冠蓋稱觀使　昨朝　冠蓋　使を觀ると稱し
田務督責須勤劬　「田務の督責　須く勤劬(きんく)なるべし
農非耕稼何所事　農は耕稼するに非ざれば何をか事とする所とせん
勸至無勸將何趨　勸に至るも勸無く將た何(いづ)くに趨(はし)らむ
一和繆盭良有謂　一たび和すも繆盭(びゆうれい)すとは良(まこと)に謂ひ有り
蜥蜴滿盆眞無幸　蜥蜴　盆に滿つるも眞に幸(つみ)無し」と
我初聞言顏已厚　我　初めて言を聞き　顏は已に厚し
食不下咽心爲癐　食は下咽せず心は癐を爲す
憑軾歸時長嘆息　軾に憑り歸時に長嘆息し
欲對畸人意先屈　畸人に對せんと欲すれど意先ず屈せり
…（後略）…

卷八「憫雨行」[11]

旱害により養蠶の桑も穀物類も生育せず、これを視察に來た王惲に對して馬車の前の地元の下級役人（田畯）は惨状を述べる。「以前は濕潤だったこの土地に半年も降水がなく、蠶も全滅に近い。農民は食べ物がある土地へと逃亡してしまい（趁熟）、家々は空き家が目立つ。土地の長老である社長（元朝は五十戸を一社として農村を統治した。いわば村長）が雨乞いをしても効果は無く、いつ雨が降るのだろうか」と。

これに對して昨朝に巡檢に來た高官（勸農使[12]か）は「農事の監督を一生懸命やれ。農民は耕やし收穫する以外に何をやるんだ。〔おまえはこの地に〕勸農（農業振興）に來たのに、何の勸農の成果もなくまたどこへ行くという

のだ」と厳しい叱責を王惲に與える。次の二句が難解であるが、「ひとたび調和したものがばらばらに亂れるということはよく言ったものだ、トカゲが甕に滿ちてもトカゲに罪は無い〔甕を管理する者の罪だ〕」という意味であろうか。要は「このような事態を招いているおまえが悪い」と。

すると王惲はこの言葉を聞いて「顔は已に厚し」と、自分が厚顔無恥であると感じ、食べ物は喉を通らず氣に病んでしまう。自分の無力さに大きくため息をつき、志ある「畸人」＝巡檢に來た高官と對峙しようとしても意思が萎えてしまう。最後は「車を驅り疾去して前途を指す、落日 蒼茫として喬木に下る（驅車疾去指前途、落日蒼茫下喬木）」と、寂しい夕暮れの中、車馬を走らせて行く景を描いて本詩を結んでいる。

詩の前書きと内容は大變興味深い。恐らく現地の老翁が語った内容をもとに、詩中では視察を先導する馬前の小吏の發言としているのであろう。また、現場で奔走する按察副使が、現場を理解していない上位の官から叱責されるというのもあり得ない狀況では無い。本詩はどこまでが事實であるかは不明であるが、七言古詩の長編として劇的な筋書きとなっており、當時の王惲の心中を偲ばせる。一方で特有の造語や表現が、本詩を難解にしていることは否めない。

この翌年の作である「田家謠」では、自作農が故郷を離れて小作農となり、さらに他郷へと流浪したいと述べる、一農民の轉落の様子を描いている。

君不見紇干山頭雀　君見ずや紇干山頭の雀の
翔集止其所　翔集して其の所に止まるを
正緣生處樂　正に生處の樂しきに緣り

凍死不飛去
人生重鄉情
疇非戀吾土
丘壟蓋世守
耕鑿自父祖
一旦委之去
倉皇事羈旅
豈不知朝辭弊廬空
暮宿何人塢
身負逋逃名
此別心良苦
我本耘田客
挨排爲主戶
歲無儋石儲
日有箕斂聚
（…後略…）

凍死すれど飛び去らず
人生 郷情を重んずれど
疇は吾が土を戀ふるに非ず
丘壟 蓋し世々守り
耕鑿[13] 父祖自りす
一旦 之を委ねて去れば
倉皇 羈旅を事とす
豈に知らざらん 朝に弊廬の空しきを辭し
暮には何人の塢に宿するを
身は逋逃の名を負ひ
此の別 心は良に苦しむ
我は本と耘田の客
挨排して主戶の爲にす
歲に儋石の儲へ無く
日に箕斂の聚め有り

卷九「田家謠」至元十八年九月九日作[14]

長編の雜言古詩の前半部分であるが、紇干山にまつわる唐の昭宗の詩句「紇干山頭 凍死の雀、何ぞ飛び去らず

や 生處（生まれ育った場所）樂し（紇干山頭凍死雀、何不飛去生處樂[15]）」を典故として、生まれ故郷の離れがたさを述べつつ、それでもなお耕作地を放棄して郷里を離れざるを得ない一農民の姿を描く。「丘壟（墓と農地）蓋し世々守り、耕鑿 父祖自りす」と、代々その地に暮らし農地を有していたのだがこれを手放し、各地を流浪する者となる。そして「我は本と耘田の客、挨排して主戸の爲にすと」、各地の地元の農民（主戸）のもと小作農となり、年に一石の備蓄もないのに、毎日嚴しく取り立てられる生活を送っている。このような悲慘な境遇のなかで「兩淮は悠悠として田は四もに開け、差徭及ばず天災無し。之に比ぶるに老稚は溝壑（こうがく）に轉がり、一飽して死すは猶ほ春臺のごとし（兩淮悠悠田四開、差徭不及無天災。比之老稚轉溝壑、一飽而死猶春臺。）」と淮河流域の土地への憧れを述べつつ、自分の居る河北の地では老人や子供の死體が轉がっていて、滿腹になって死ぬのならまだ幸福だと述べる[16]。このような人々は當時數多く存在したであろう。最後は「我は初めて言を聞き嘆息を爲す（我初聞言爲嘆息）」と王惲の感想へと展開し、未納の税を抱えた民を思いつつ、その督促業務への心理的疲勞感を吐露して結びとしている。

按察副使という職務とも關係があるだろうが、王惲は官を退き郷里の衛州汲縣（現河南省衛輝市）で生活している時期でも水害の視察に赴いたりと、一貫して農民の生活に關心を向けている。たとえば卷三四「農里歎」并びに序では、その序文で作詩の背景を述べている。

> 至元廿八年秋九月、水災を檢視し、趙の東偏 平丘より劉村に至る凡そ一十一處を渡る。老農の問答に因りて、集めて十絶句と爲す。庶（こひねがはく）ば以て農家の終歲 苦しみを作し、卒として成る者無きに至ること有るを見んことを、哀しむ可きなるかな（至元廿八年秋九月、檢視水災、趙之東偏自平丘至劉村渡凡一十一處。因老農問

答、集爲十絶句。庶以見農家有終歲作苦、卒至於無成者、可哀也哉[17]。

至元二八年（一二九一）、王惲は前年に病のため福建閩海道提刑按察使の官を辭し、この年の半ば頃までには鄉里に戻っていた。平丘と劉村はその位置を特定出來ないが、「趙」は現在の山西・河北南部と河南北部の一帶を言う。衞州はその「東偏」に位置し、東南數十kmで黄河に接する。この邊りに莊園を保有していたのであろう。河北・河南ではこの年一月から五月まで雨が降らなかったのが、河南では一轉して五月下旬以降大雨が續いていた[18]。王惲はこの年六十五歲で、前年に病を得ているにも關わらず、自ら十一カ所を視察している。まさに地方官としての「體察（現地に赴き調べること）」が習い性になっているかのようである。

ここでも王惲は老農と語り合い、これをもとに七絶十二首の連作を作っている。彼の地元であり、言語上の問題は無いので、從者を通してでは無く實際に言葉を交わしたのであろう。十二首の詩は災害の狀況を描寫したものが多いが、その中で王惲は現場で對應する官吏の勞苦についても配慮している。

毎歲災傷走吏曹、　毎歲　災傷　吏曹を走らしめ、
何當南陌到東皐。　何ぞ當に南陌より東皐に到るべけんや。
正緣事重人微甚、　正に事重く人微きこと甚しきに緣り、
特遣官來慰爾勞。　特に官の來るを遣はしめ爾が勞を慰めん。

「農里歎」其の九

「事重く人微きこと甚し」というのは、長年按察副使や按察使を勤めた經驗から出た言葉であろう。どうしてこ

の人數で南に東に奔走して災害對應が出來ようか、と。民衆も疲弊しているが官吏も疲れ切っている狀況を正確に把握し、現場で對処している下級官吏を頤使することが無いのは、先に見た「憫雨行」のような體驗を何度もしているからであろうか。中央から官を派遣して貰い、現場の皆さんを慰勞しましょうという氣遣いは、老農との問答の中で出てくるとは考え難い。官吏に對する王惲の配慮が垣間見える。

卷十一「流民嘆」は遂に流民となった者の嘆きを題材にした詩である。詩題には「六月七日　丐者の門を過ぐる有り、其の説を聞きて因りて錄し、而して此を作る（六月七日有丐者過門聞其説因錄而作此）」とあり、農民のみならず丐者（こじき）にまで話を聞いている。

我家本燕雲　　我が家は本と燕雲にあるも
未省離鄉國　　未だ省りみず　鄉國を離るるを
前年一霜秋稼空　　前年　一霜　秋稼空し
望入田間禾穗黑　　田間の禾穗の黑きを望入す
忍饑猶待下年收　　饑へを忍びて猶ほ下年の收を待つも
一滂高原水三尺　　一たび高原を滂す　水三尺
人生重遷乃本心　　人生　重遷は乃ち本心なるも
一餒催人忘南北　　一餒　人を催して南北を忘る
水採無菱芡　　水採　菱芡（りょうけつ）無く
山收闕橡栗　　山收　橡栗（しゃりつ）を闕（か）く

雖云生處樂　　生處の樂しきと云ふと雖も
乏物得生活　　乏物　生活を得
扶攜遠趁河南豐　　扶攜して遠く河南の豐かなるに趁(はし)り
道路無資日行乞　　道路は資無く日に行乞す
毳衣穿結杖蒿藜　　毳衣(せいい)　穿結　蒿藜を杖つき
氣力凌兢雙脛赤　　氣力　凌兢として雙脛赤し
（…後略…）

卷十一「流民嘆(19)」

現在の北京や大同一帯である燕雲の農民が、耕作地を棄てて流民となり乞食をしていた。前年は秋の天候不順、これを乗り越えると今度は水害。「重遷（安易に居を移さないこと）」が本意なのだが、饑えに耐えかね方角も關係なく他郷へと流浪する。山野水澤には食料となりそうな菱の實やドングリもない。生まれ故郷が一番良いと言うけれど、何も無いところで生きなければならない。それでも河南が豊作であると聞き、助け合いながら遠い道のりをやってきた。つぎはぎの毛皮に藜の杖をつき、冷さのために裸足のすねが赤くなっている。ついには物乞いをするうちに王惲の屋敷の門前に至った。

本詩がいつ書かれたものか不明であるが、王惲が華北で地方官を勤めていたときか、ないしは郷里に隠棲中に書かれたものだろう。いずれにせよ王惲はそれなりの官位にあり、邸宅ないし官舎に住んでいたにも關わらず、彼らが居住する区域で物乞いがいるというのは、果たして一般的であったのだろうか。當時でも稀な事柄だったため、特に詩として留めたのだろうか。そしてこの乞食とは彼の從僕が對應し、その言葉を間接的に聞いたのだろうか。

それとも王惲自身が直接問いただしたのであろうか。想像は盡きない。ただこの流民の獨白は、王惲による完全な創作というには壓倒的な現實性を帶びている。霜害による不作をひとたび乘り越えるも、水害によりやむなく故郷を捨てる。そして山野の食料はすでに食べ盡くされていて何も無い。

引用は詩の前半部分であり、これ以降は「私は太古の堯の洪水と湯王の旱では、民が土地を離れて流浪することを免れあまり衰弱しなかったと聞いている（我聞堯水與湯旱、民免流移少損瘠）」と、王惲の回答が續く。豊作凶作の物價調整を行う常平倉や、凶作時の救荒に用いる義廩などに言及し、各地の現狀を述べるが、さすがに流民に答えた内容とは思えない。

更に悲慘な狀況を描いているのが卷二四「役者の語を錄す（錄役者語）」十一首である。詩中に「王城」や「桑乾河」の語が散見するので、當時建設中であった大都へ勞役に行った農民たちを題材にしたものであろう。餘りに凄慘過ぎて、傳統的な「風雅」や「温柔敦厚」といった詩歌觀から大きく逸脱している。その中でもとりわけ凄絶な情景を描いた詩を幾つか擧げよう。

一夫詛祭九魂知　　一夫 詛祭すること九魂知る
護我南行爾亦歸　　我の南行するを護れ 爾（なんぢ）らも亦た歸らむ
惆悵桑乾河畔月　　惆悵たり 桑乾河畔の月
至今寒影慘無輝　　至今 寒影 慘として輝く無し

「役者の語を錄す」其の三

この詩には小文が付されている。

或るひと云ふ　河南の役夫既に罷めて歸り、九者皆な歿し、其の一　衆骨を負ひて西のかた瀘溝を渡り、因りて祭りて祝して曰く、「今汝等倶に歿し、我幸に獨り全し、汝らの骨を抱きて以て歸る。汝等靈有らば、當にを我を佑(たす)けて汝らの父母妻子と行きて相ひ見(まみ)へしむべきなり」と。其の人　次の范陽に前(すす)みて、亦た病死すと（或云河南役夫既罷歸、九者皆歿、其一負衆骨而西渡瀘溝、因祭而祝曰、「今汝等倶歿、我幸獨全、抱汝骨以歸。汝等有靈、當佑我使與汝父母妻子行相見也。」其人前次范陽、亦病死）。

河南から大都建設に招集された役夫たち十人のうち、勞働期間が終わる頃には九人が亡くなっていた。九人の遺骨を抱えて歸郷する男は瀘溝（桑乾河）を渡る際に、彼らの靈に向かって「私を家族のもとへと歸り着くよう加護してくれ」と祈ったが、その男も范陽（現河北省涿州市）で病死した。何とも酸鼻を極める壯絶な話である。王惲はこれらの風聞を、實際に勞役から歸郷した者たちから聞き取ったのであろうか。

父來接子値同徒　　父來たりて子を接(むか)へ同じ徒(みち)に値(あ)ふ
欲話渠儂涕泗俱　　話さむと欲として　渠儂　涕泗倶にす
昨日道邊因困臥　　昨日　道邊　困(つか)れに因りて臥す
不知今日有還無　　知らず　今日還(かへ)ること有りや無しや

同、其の八

ようやく再會した父子は喜びの餘り言葉が出ない。ともに泣き、そして疲勞により道ばたで一眠りする。しかしその父子が目覺めてともに歸郷の途次へと着いたのかは分からない。そのまま路傍で二つの骸となってしまうのか

も知れないのである。

病軀甫差須扶護　病軀 甫差 須らく扶け護るべし
趁伴貪程日夜奔　趁伴は貪程し日夜奔る
大半殣遺多爲此　大半の殣の遺るは多くは此れが爲めなり
故郷歸去有殘魂　故郷に歸り去りて殘魂有り

同、其の九[20]

甫には大の意があり、差は瘥（疫病）に通じるので、「甫差」は重篤な疫病をいう。王惲の造語。「趁伴」は道連れ、同道の者。「貪程」は道のりを急ぐこと。重病人を抱えながら歸路を急ぐが、家郷に辿り着く前に病死してしまう者が何人もいる。彼らの遺體は路傍に捨て置かれているのであろうか、殣（腐臭）がそこら中に漂っている。何とか家郷に辿り着いた者たちが居る一方で、道半ばで斃れた人々の殘魂（供養する人のない靈）が數多く彷徨っているのである。

これらの詩の出來不出來はひとまず措き、このように悲慘かつ殘酷な狀況に置かれていた當時の民衆の姿を、正面から取り上げて描寫したことは評價すべきであろう。

四．これらの詩の背景と特徴

王惲の詩文集中で頻出するのは勸農という語である。食料生産は農業革命以降において人間社會の基礎であるか

ら、歴代王朝もこれを提唱し、古くは陶淵明がこれを詩題にしている。だが十三世紀後半の華北は事情がかなり異なっている。安定した王朝のもとで繰り返し行われた農業奨勵ではなく、歴代の王朝交替期のなかでも屈指の大混亂期が収束しつつある中、人煙の絶えた荒野からの再建である。政府が把握できる定住者は前述のように壓倒的に少なく、灌漑設備なども長く續いた戰亂で破壞されており、農業を振興するというよりもほとんど復興ないし新規に起業するに近い狀況にあった。この中でフビライ政權は屯田政策を行い、一部の兵士を農事に專從させ、軍事要員を強制的に農業從事者に轉換させるなどの施策を行った[21]。何とかして軍事上の補給物資を生產させ、同時に荒廢した農村を立て直そうとしていたのである。

そして王惲自身も勸農文（卷六二「勸農文」）を殘しており、これは後年江南地域において多く見られる勸農文の嚆矢となるのであるが、すでに指摘されているようにその內容は大きく異なる。江南における勸農文は「遊蕩好閑、生業に務めず、累（たび）たび勸むるも改めざる者」（『元典章』卷二三、戶部卷九所收「至元新格」）を取り締まるなど治安維持の側面が強いが[22]、王惲の執筆したものは農耕・養蠶・水利・畜產など多岐に渉って具體的に農業振興を奬勵する內容となっている。これは實際に多くの農村を巡檢して得た知見に基づいているのであろう。また、文集で「勸農文」の直後に收錄されている二十首の「勸農詩」は、七言絶句の形式で施肥や植桑など農業や生活上の各方面に渉る主題を平易に述べている。奇字難語を好む王惲の詩としては異例の平易さで、おそらくは實際に民衆に讀ませることを企圖して作られたものだと思われる。

詩中にしばしば現れる老農とは、元來單に農家の老人を指す語であった。だがフビライ政權のもとで社制が行われたことを考えると、社長である可能性は高い。王惲は按察副使ないし按察使として、巡察と勸農に訪れた村で見た光景や會話などを詩の題材として作品化しているのである。これは彼の詩の大きな特徵である。金詩には管見の

限り類例は少なく[23]、同時代でも胡祇遹に僅かに見られるのみである。

一般に詩では民の勞苦に言及することはあっても、その個々人のリアルな状況や言動を描寫することは少なく、だからこそ杜甫や白居易が人民詩人としての評價を得ている。元好問は金朝の瓦解に面してその悲劇を詩に詠ったが、あくまで背景の第三者として現れるのであり、作者と向き合った一人の人間として描かれることはほとんど無い。王惲の詩における農民の描寫は實際の會話を題材にしつつ、當時の荒廢した農村の様子や、農民が故郷と耕作地を捨てて他郷に流浪していく過程など、きわめて生々しく描寫している。これを詩という、散文に比べ短い文字數で、壓縮した表現形式で書き殘した。史書や事狀（役所の報告文書）でも當時の華北の狀況は窺い知ることが出來るが、これらの詩は一種のルポルタージュとして、時代の空氣を傳えるものだと言えるだろう。

王惲が生涯に數度務めた提刑按察副使や提刑按察使は、その職務として「民の疾苦を問う（問民疾苦[24]）」というものがあった。實際に各地を巡檢し、忠實に職務を行っていたことが、このような詩となって結實したのであろう。また、彼の出自から想像するに、下級官吏として民政の現場に關與してきた家系であることも影響を與えたのかも知れない。フビライ政權の誕生、元朝の創業という盛時の一方で、華北の戰後復興という使命感は、蒙元初期の漢人實務官僚にとって共通の認識であった。彼ら漢人官僚の上にモンゴルの王侯貴族や色目人官僚がいたとしても、金末の士大夫に比べて政治參加する機會は飛躍的に增えており、經世濟民に携わっているという實感があったのであろう。王惲の文集中、卷七八『承華事略』以降には、様々な上申書や政策提言が收められている。

五. おわりに

王惲は仕官以降、常に天下國家の大事を考え、それは時に彼の官職に相應しくないほどの大局を見据えたものであった。特に翰林院や御史臺など中央に奉職した時期には、當時の事柄を『中堂事記』『烏臺筆補』『玉堂嘉話』（文集卷八十～百所收）としてまとめている。河北道提刑按察副使として中央を離れているときにも、前述の『承華事略』六卷を當時の皇太子チンキムに上進し、後年にはその子成宗テムルには『元貞守成事鑑』（文集卷七九所收）を上進している。彼が次世代の指導者を名君たらしめようと積極的に著述、上進を行っていることが分かるが、特に『承華事略』については按察副使程度の官が皇太子に献上するというのは、いささか違和感を覺えるほどである。

王惲は經世濟民を實際に行うべく、職務に奮勵し、次代のために膨大な記錄を殘し、著述をまとめた。本稿で取り上げた詩はまさしく彼の職務と熱情が生み出した作であろう。詩としての完成度や詩人としての知名度、後世への影響については、王惲は元好問に遠く及ばない。だが元好問が瓦解していく金朝末期の戰亂を描いたとのと同じく、王惲はその詩精神を繼承しつつ、より民衆に寄り添いながら元朝創業時の荒廢を詩として描寫した。彼と同年の友人胡祇遹も同樣に民衆を描寫した詩が多く、彼もまた按察副使、按察使として各地を巡檢した經歷を持つ。彼ら舊金朝系の人々の詩が同樣の問題意識を共有していた可能性は高い。胡祇遹ら同時代の「漢人」の詩については、今後の課題としたい。

本稿は第十九回遼金西夏史研究會大會における發表をもとに改稿した。大會では歷史學の見地から多くのご指摘

とご意見を賜り、本稿に反映することが出來た。心より厚く御禮申し上げます。

本稿は平成三十一年度慶應義塾學事振興資金の成果の一部である。

注

（1）『元史』巻五「世祖本紀」二。

（2）『金史』巻四六「食貨志」一。

（3）原文「没有元好問的元好問時代」。査洪德「元詩發展述論」、『江淮論壇』二〇一八年第一期。

（4）王夫子等撰『清詩話』第八三頁、上海古籍出版社、一九九九年。

（5）蘇天爵「書呉子高詩稿序」、『滋渓文稿』第四九五頁、中華書局、一九九七年。

（6）歐陽玄「雍虞公文集序」、『歐陽玄集』第二二八頁、吉林文史出版社、二〇〇九年。

（7）張仲深『子淵詩集』原序、四庫全書本。

（8）張晶「元代詩歌發展的歷史進程」、『吉林大學社會科學學報』、二〇〇五年第五期。

（9）王惲「金故忠顯校尉尚書戸部主事先考府君墓誌銘」、楊亮・鍾彦飛點校『王惲全集彙校』巻四九（第二三一六頁）、中華書局、二〇一三年。以下、王惲の詩文は本書に拠る。

（10）拙論「王惲とその師たち―姚樞・王磐・元好問」（『藝文研究』第一一一号、二〇一六年）参照。

（11）『王惲全集彙校』、第三一九頁。

（12）「觀使」は「勸使」の誤りか。「觀使」という略稱の官職は確認できなかった。提刑按察副使である王惲を叱責出來る立場にあり、元朝初期に農業關連を管掌した職位としては「勸農使（四道巡行勸農使、至元七年二月設置）」が考えられる。いずれにせよ高官が來訪し、現場の狀況を考慮しない、心ない發言を王惲に浴びせているという内容である。巻八五『烏臺筆補』三「事狀」には、按察使の薄給多忙を勸農使・勸農副使と比較して待遇改善を求める「論監

司簽事職劇祿薄狀（監司簽事の職劇にして祿薄きことを論ずる狀）」という上申書が收錄されている。

（13）鏊は平底の鍋で餅（おやき）などを焼く、フライパンのような厨具。耕鏊で耕すことと主食をつくること、生活することを言うのであろう。王惲でも本詩にのみ出現し、『四庫全書』を檢索しても他に用例を見ない。

（14）前揭書、第三三二頁。

（15）『唐詩紀事』卷二「昭宗」の項に本詩句が見られ、『山西通志』卷二一「紇真山」の項でも唐・昭宗の詩として引用されている（紇干山は紇真山の別名）。初出と覺しき『新五代史』卷二一「寇彦卿傳」では「俚語云…」となっており、俗謠が昭宗の詩として誤傳したものと思われる。

（16）「春臺」は春に眺望の良い景色を眺める場所なので、「春景色を眺めるように幸せだ」の意味か。「猶春臺」という用例は本詩以外に一例があるのみであるが、「如春臺」を用いた「熙如春臺（熙〔なごやかに楽しむ〕たること春臺の如し）」は表現として頻出する。「春臺」という語には「おだやか、なごやか」というイメージが定着しているものと思われる。さらに當時の口語として食卓の意味もあり、これを掛詞にしているものか。

（17）前揭書、第一六九一頁。

（18）卷十一「福星行」序に「辛卯の歲（一二九一）正月より五月まで雨（あめふ）らず、是の月廿一日河南雨三尺、故に是の詩を作りて以て憫れむなり、六月五日雨大の作」とあり、卷七六〔三奠子〕三にも「辛卯七夕の時、久しく雨（あめふ）りて未だ霽（は）れざる中、感寓を以て嘆を爲す」とある。

（19）前揭書、第四三二頁。

（20）以上三首、前揭書第一一九一～一一九三頁。

（21）例えば成都方面の援軍として送られた屯田兵たちが、民戸へと改められた例などが見られる（『元史』卷百「屯田」）。井黒忍『分水と支配　金・モンゴル時代の華北の水利と農業』第六章「屯田經營と水利開發――至元末年以降を中心に」（早稲田大學出版部、二〇一三年）參照。

（22）伊藤正彦「元代勸農文小考―元代江南における勸農の基調とその歷史的位置―」、『文學部論叢』四十九、一九九五年。

（23）管見の限りでは、金代中期の王寂「懿州東北山下問路於耕者」詩に農民が出現し、蕭貢「荒田擬白樂天」、李俊民「壬申歲旱官爲設食以濟饑民」、麻九疇「牛嘆」、楊奐「涿南見蠶婦本汴梁貴家」等の詩があるが、いずれも一人一首のみである。趙元と辛願には農民ないし農村を描寫した詩が複數存在するが、趙元は失明後鄉里に戻り窮乏した生活を送り、辛願は農民で、いわば「民」の立場から「民」を詠った例外的作品である。

（24）たとえば『廟學典禮』卷一「官吏詣廟學燒香講書」に「該提刑按察司、官所至之處、勸課農桑、問民疾苦、勉勵學校、宣明教化」とある。